

丑正月十五日

稻垣 淡路
松平 日向

三郷惣年寄中へ

一、此節米穀高直に候處、當地酒屋共春酒造候米、買込候段相聞え候。米高直にて諸人難儀の時節に候間、今日より春酒造候儀今年は相止可申候。買込置候米の分、當月中白米迄も不殘早々賣拂可申候。若隱し酒造候者相聞候はゞ、急度可令沙汰候條、酒屋組合の人數相互に逢吟味、猶又年行司相廻り、左様の儀無之様可申付候。

丑正月十五日

淡路
日向

三郷惣年寄中へ

一、駿臺雜誌淨書の儀室鳩巢より大地昌言宛狀
大地兄へ來書之内
内々かな書の書も、老夫自筆にて全部漸々頃日調候て、只今表紙など爲付候。近日献上可致と存候。去共先づ一往窺候ての事に候。定て献上候へとの事に可有之候間、相違あるまじく候。扱々去年より手痛を押候て、毎日調候得共

はか參不申、やうく頃日相濟、先づ致大慶候。就其下書の本三冊并料紙五帖此度進候。乍御苦勞此下書の通、御淨書出來次第に御越可給候。殘二冊追て可進候。こゝもにても弟子の中、寫度と申者有之候故、残り二冊共其方へ遣候て、其元へ此度進候三冊出來次第、取替進可申候。先々三冊越申候。貴殿御調濟候はゞ、其本を此方へ御越候て、此下書をば其儘其元に御とめ可有之候。此下書跡より改候處も有之、書面わけも無之候間、追て御清書候て其元に通一り被指置、同學の衆へも爲御見候様に可被致候。此度拙者調候掛紙も進申候。書そこなひも一枚進候。文字くばり大小は定めは無之候間、御勝手次第にて候。但かな遣のちがひは無之様にいたし度候。此下紙大方かな遣も改申候。を。おなども違不申様にと存候。の。乃。宍。其是等はいづれも同事にて無構候。さてはえ。へ。う。ふなどちがはぬ様に致度候。大方此下書の通よく御座候。もし前後相違の所など有之候はゞ、御改可被申候。其外誤も候はゞ御申越可給候。以上。

正月十四日

一、室鳩巢癸丑新年の詩

癸丑元日二首

欲曙歡聲動四隣。家二歲酒復迎春。富山雪自鴻荒白。武野草連海甸新。城上樓臺生紫氣。陌頭冠蓋起紅塵。老來衰病惟高枕。對客羞稱報國臣。
玉燭光調歲月遷。太平文物入新年。萬川潮上蓬萊水。四海恩霽雨露天。飛蓋門前人似織。鳴驪橋外草如烟。武城自古繁華地。英妙春來幾著鞭。

新年別賦言懷三首

東海開都會。中興二十霜。春歸先萬國。道泰對三陽。濟々周多士。陳々漢大倉。更聞荒政下。恩澤及遐方。
新年佳氣集。春遍鳳凰樓。日出千門曙。水明萬騎流。簪纓人物盛。玉帛禮儀優。寄語巖廊下。莫貽杞國憂。
玉馬諸侯貴。踏々集鳳城。日華春仗動。霞色壽杯傾。借問金陽固。如何帶礪盟。青雲知己少。無路問蒼生。

一、前田吉徳の喜悅

中將様當十五日御登城被遊候處、於御座の間去々々御手傳金の儀、早速御許容、其後西國邊損亡に付早速被御心附被

仰上候趣、御満足被遊候旨上意にて、御請相濟御退座の所、又被爲召候て御領國御仕置宜敷段被聞召、御喜悅被思召候一説に猶又無御可被仰付旨も上意の由。との上意に御座候段、無比類御首尾、恐悅至極の御儀御同意奉存候。依之西御丸へも御登城、御老中方並石川近江守殿若御年寄衆迄御勤被遊、且又御歸館以後廣徳寺へ爲御名代奥村内匠被遣候。今般の御首尾、曾て中將様御手柄とは不被思召候。偏に松雲院様御蔭と被思召候由、御意の旨潛奉承知候。此儀別て奉恭喜候御事に御座候。於殿中細井佐次右衛門殿へ、右上意の有増御咄被遊候に付、御手柄可申上様無之旨被申上候へば、聊以て此方にては無之候。先祖以來の家法を守申迄の儀と御挨拶に付、御家法をよく御守被遊候儀、則御手柄と奉存候旨被申上候段。右上意の趣並此一件も、皆細井殿即日被參候て、組頭衆・聞番衆へ物語の趣に御座候。頭分へ於此元被仰渡候趣は、御懇の上意と迄に御座候。此外にも段々御懇の儀ども御座候旨申候得共、是は相知可申様も無之儀、附會の妄説共と奉存候。中飛脚罷越候間、尤各様御拜聽と奉存候得共、猶更申上度如此御座候。